

伝統芸能復興支援活動

報告：千田倫子

■陸前高田市気仙町へ

震災後、東北沿岸部の芸能の状況を知りたいと現地を訪ねた五月。一関市の関根太鼓店さんに情報をいただきながら、辿り着いた場所が、そこに町があったことが信じられない光景の陸前高田であった。祭りに熱い思いを向けていた方の消息を、避難所や仮設住宅を辿って訪ねあて、お話を聞いた。

八月、その陸前高田市気仙町で例年の祭りの日に「けんか七夕（たなばた）」の山車が運行されると聞き、現地へ再び駆けつけた。

町民が避難所や仮設住宅に離散している上に、山車の修繕や飾り作りの作業ができる場所も無い状況で、祭り実現は誰の目にも困難と映ったようだ。しかし、三十代の若衆達の熱い思いが地域の年配者や周りの人々をつき動かした。その思いとは、震災で亡くなった方々の供養と、離散した気仙町民が久々に集まり、心に刻まれている祭りを味わって、また前を向いていこう。そして自分達が地域を担っていくんだ、という宣言でもあったと思う。子ども達のはじけるような笑顔、太鼓を叩きながら涙が溢れ出る若衆、すべてを見尽くし見守っているような眼差しの年配の

方々。人々の思いが綴られた短冊をなびかせながら、跡形も無くなった町を山車が曳かれていった。

若手の代表の方が祭りの最後、叫ぶように呼びかけた。「役員の人達、今の惨状だけ見て町内会解散なんて言わないでくれ。青年部はあきらめない。気仙町から離れたくねえんだよ、またここ家建てて、みんなで暮らしてえんだよ。これから一歩ずつ進んで、気仙町の七夕、復活させるぞ。絶対やるぞ!」

■「けんか七夕」について（岩手県指定無形民俗文化財）

陸前高田市気仙町のけんか七夕の起源は、900年ほど前、先祖慰霊のために行われたものと伝えられている。毎年、8月7日に地区ごとに山車が出て、町内を練り歩く。山車は、太い樺の丸太を輪切りにしたものを車輪とし、その上に櫓を組んで、割り竹に色とりどりの和紙で飾り付けがされる。お囃子の太鼓や笛は、その櫓の上で奏され、2本の曳き綱をそれぞれ200人ほどがかけ声をかけながら練り歩く。時に、山車と山車を豪快にぶつけ合うので、「けんか七夕」と称され、人々に愛されてきた。昭和40年頃、存続の危機にあったが、お囃子の保存会発足と、山車一台で乗り切り、2010年までは、四つの町内の山車が七夕の夜を彩っていた。2011年8月7日は、離散した住民の皆さんの熱い思いで困難を克服し、被害を免れた山車一台を飾り付け、気仙町を練り歩いた。



山車は、ただ一つ津波の被害を免れた下八日町のものに、それだけが生き残った鉄砲町の芯棒が組み合わされていた。4つの町の、違う半纏を着た男達が、一つの山車に思いを合わせた。(写真：千田倫子)

■私達にできることは何か

地域に思いを注ぐ人達のおっしゃることはただ一つ、祭りは人の暮しがなければ存在しない、この土地に人を戻すということ。ふるさとをそれでも愛する心、希望の持続、町の復興計画…それらを繋ぎ止める力になる「祭り」。地元の方にとってこの度の運行は、まだ復活ではない。復活と言える日まではまだ道のりが長いだろうが、お話を耳を傾けながら、私達も一緒に希望を持ち続け、明日を見つめたい。まずは、今年の8月7日に向けた動きの情報収集から。その状況を発信し、多くの方々と共有することが私達の歩みと考えています。また、ご縁のあったその他いくつかの土地の方々の状況も調査を進めてまいります。

■気仙町の支援情報

気仙すぎのご基金 <http://suginokofund.com/>

(気仙町内の小中学校への復興支援基金)

こちらのサイトで「気仙町けんか七夕まつり」の動画を見ることができます。

■情報をお寄せください

祭りや芸能の復興が、地域コミュニティの再生の大切な要素であると考えます。東北の方々の芸能や祭りへの思い、そして記憶を風化させないため、被災地の祭りや芸能に関する情報をぜひお寄せください。

復興に向けて、共に歩んでいきましょう。